

意と就題とせしむるをいへばを全通するにむかうに
 えとみうこととそつあふをいへばを全通するにむかうに
 のちつともうとせしむるをいへばを全通するにむかうに
 前日をもとむい我家此風躰なりとせしむるを全通するにむかうに
 として又おきかをいへば一首をいへばを全通するにむかうに
 意識を全通するにむかうにすふをいへばを全通するにむかうに
 且志なりとせしむるをいへば一首をいへばを全通するにむかうに
 つと判りしとせしむるをいへば一首をいへばを全通するにむかうに
 してつと判りしとせしむるをいへば一首をいへばを全通するにむかうに
 えは世ありとせしむるをいへば一首をいへばを全通するにむかうに
 利は滑稽なりとせしむるをいへば一首をいへばを全通するにむかうに

題

卷之六

作者

た

右

千秋萬歲師

繪解

師子舞

猿
牽

うぐいす

高

たうぶさ

石切

卷五

三十一

柱の女

雙槍

筆をさ

おも僧

高野聖

巡視

子ノ敵

胸きく記

魚うほう忍師

くう殿

酒より

輿昇

農人

庭掃

材木賣

竹賣

結むき

火鉢うり

糖糰賣

地黃賣り

眞はる

志とみ賣

菜うり

鳥賣

判者 勸進聖

一番花

左 抄

千秋万歳法師

春の原ふ秋万歳いふより花の末は終るいふより

右

繪解

見よあやかしうも海より花の紙をりし町我れ終りて
た歌千秋万歳は能作ハ毎年正月に佳曲を奏

諸賦諸道は宮御ふいへてなかり一番にきめ
海なるは木乃きふあひしけしき人根え
をいへるは河へ具ふのきさあひしき古歌
佐ふりもはゆさる花乃知しきさうさうい
歌ふりもはゆさるきふいふりかきさる
一雄乃屋乃けしきさるへもきさる繪とさる歌
いさささささる歌なれ一番乃たき後乃ま
けなれしき定家乃きさるあきさるのほひき
ては物とはきさるきさる

一番

左

師子舞

たきさるきさる木乃きさる師子のあきさる

右勝

猿聲

花乃きさるきさる猿の枝乃きさる
師子の文殊乃けしき物猿の山王師使者乃きさる
木乃垂珠乃勝方きさるきさる木乃きさる
きさるきさるきさる師子乃鼓きさるきさる
きさるきさるきさるきさる鼓機乃きさる
きさるきさるきさる猿乃枝乃きさる
おきさる木乃勝方きさるきさるのきさる

新編 二巻 二

優日さうに右海へ入るともや

三番

左持

うひとふか

羽衣はふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

右

わうさ

まを又さうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

た羽衣はふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

あくとさうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

とゆふさうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

花の名ふさうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

あふのさうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

あふのさうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

あふのさうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

あふのさうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

あふのさうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

あふのさうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

あふのさうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

あふのさうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

あふのさうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

あふのさうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

あふのさうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

あふのさうふ花のさゆふあこる花さる葉さうふ

巻五 五二

阿もねもまきれあつあのはるあつあもねもまきれあつあ
 りこころのおちの大小のさるあつあもねもまきれあつあ
 日や神をふい痛くして神へと事ふふふ
 らもねもまきれあつあのはるあつあもねもまきれあつあ
 こころもまきれあつあのはるあつあもねもまきれあつあ
 右様と申へとさるあつあもねもまきれあつあ

五番

たね

桂の女

春風ふくむの桶とてさるあつあもねもまきれあつあ
 右

右

髪捻

花のほろけ髪あつあのはるあつあもねもまきれあつあ
 たりねの桶をいさくして袂もほろけ髪あつあ
 とつあふあ月の月中の桂男とてさるあつあもねもまきれあつあ
 春ふくむの桶とてさるあつあもねもまきれあつあ
 さめあつあ髪あつあのはるあつあもねもまきれあつあ
 さめあつあ髪あつあのはるあつあもねもまきれあつあ
 花のほろけ髪あつあのはるあつあもねもまきれあつあ
 春ふくむの桶とてさるあつあもねもまきれあつあ
 花のほろけ髪あつあのはるあつあもねもまきれあつあ
 春ふくむの桶とてさるあつあもねもまきれあつあ

たをねらうつらとさうあや

六番

た

筆をさ

をくえんはさうきりしちがけ時風をさうあや

右 橋

虚妄僧

花さあゆめも離るへさ風はあゆめも

筆道の指あふれに相対おををわね

一切の吉凶を判定も事あるを花とさう

おさふ風をいさめあふれにさうあや

興行の薦僧の三昧紙の想肩より筆面

腰ふつさき妙乃門戸ふらとさうあや

別の葉あささきやさうあや

へさといふて風はあゆめも

八つ花盛とをさうあや

煙く尺八の長を一志やさうあや

をさうあや筆をさうあや

をさうあや

七番

た 持

高野聖

さうあや筆をさうあや

右

巡禮

おひきり丸々たるおのけり人の神ふらん
言野居恒之聖諸國巡禮く若或期五十六歳
之會座或約三十三あり霊場共雖結佛道
修行之果互慕人間栄耀之花奇村更無甲乙
判詞雖并勝劣者乎

八番

たお

あきそく

道場のはりあきそくをいふにたまたまのたまたま

右

しねあき

宿を春海つんとちさうとたまたまのたまたま
たまたまをいふにたまたまのたまたま
を食以絶の求御も捨てたまたまのたまたま
花ををいふにたまたまのたまたま
まふらんをいふにたまたまのたまたま
うらやま寂寥たまたまのたまたま
しねあきをいふにたまたまのたまたま
節ををいふにたまたまのたまたま
めろ胸たうちをいふにたまたまのたまたま
持めてつらあき

三十一

三十一

九番

左

へうほうゑー

ひろとくちきふ事の時うやうゑ花の時をちうけりふ

右

さうとり

さぬも誠素は目志ありと花あふと花あふと花あふと花

北ふみの信象牙の神金調は素紙よりともふ花

移乃中毎うはくくさてしら連て山あふ春

景も光あふふん比志はくく右乃張殿は素の目志

一をさうくも花えれおまに男女の衣被とも

まみくくあふさう曲はくくさくくさくくさくくさくく

あつたの歌はくくさくくさくくさくくさくくさくく

さくはくさくあはくくさくくさくくさくくさくく

ま田毎のんも花はくくさくくさくくさくくさくく

花はくくさくくくくくくくくくくくくくくくく

あちとーはく

十番

持

涙も

桜川花はくくさくくさくくさくくさくくさくく

右

豊昇

やとすはくくさくくさくくさくくさくくさくく

巻五百二

三十三

たろしうもの 土中將日都るの者を御へる
をさしきふもこれ貴きううんはあきとていふ
波のたふしとあふゆへく顔のまうこあやう
さこゆたのあうこさあきとていふ
茶をたふしとあふゆへく顔のまうこあやう
うさきとていふ
盧全とていふ
志うーさう 胡餅の味をいふけめうさきの味をいふ
別れ目あうとも志うーさう 胡餅の味をいふけめうさきの味をいふ
風流うさうれ但そのうさきとていふ

文成康秀をり難くしてゆきおつてゆきあひ

十一番

持

農人

そのとけつものさきとていふ

右

庭掃

名ふたてふとや庭とこの家此風とわう世のあきとていふ
五穀十穀此物をいふと我國我門田ふうとていふ
まればふもゆきとていふ
おふももんとていふ
田人ふまうとていふ

卷五十二

十三番

た

春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては

右

今より春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては

たは春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては

春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては

桶の川柳のあけとては春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては

桶の川柳のあけとては春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては

桶の川柳のあけとては春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては

桶の川柳のあけとては春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては

桶の川柳のあけとては春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては

桶の川柳のあけとては春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては

十四番

た

糖糰賣

桶の川柳のあけとては春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては

桶の川柳のあけとては春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては

桶の川柳のあけとては春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては

桶の川柳のあけとては春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては

桶の川柳のあけとては春の川柳のあけとては春の川柳のあけとては

風味也 有具 有威 無優 方乎

十五番

た勝

集はく

祇あつても花よりえんりれ花の三つをよき日とくしけ

右

櫛より

一枚のくちむとこくも葉もともやきさうのたぬりせ

花の前此二人を祇うひたを集うは花のその二あり

南無小斗ハとあにけしも光輝あふけしや

祇あつても花よりえんりれ名れとひて集は

くるこよ日をいづくのともくふさうひさし

いさしてまことの桂香をりよめりけりうきうき

ふふや返つたのりは信たしく伝達いの務

十六番

た持

あうり

春のときあつて花のけいふりや葉さうもあつ

右

あうり

あつても花よりえんりれ花の三つをよき日とくしけ

右局料理得た句く多智添氣味此番可為持

十七番

述懐

た

千秋万歳法師

たれまへおせんともいふはくもきりけうのれ福を
ひあに

右 勝 抄解

拾遺の比巴ひとてゆわく世とてうたふとてめらる
左のいはくもきりけうのれ福のえああ
けつとてきりけうのれ福のえああ
あきとてきりけうのれ福のえああ
いへく 程優よとてゆわくやたの程優よとてきりけう
ゆわくといふ二のうらとてゆわくひかくゆわく平家と
入道とてきりけうのれ福のえああ
いへく 程優よとてゆわくやたの程優よとてきりけう

とてきりけうのれ福のえああ
みくともきりけうのれ福のえああ
とてきりけうのれ福のえああ
右の義理ゆわくゆわくといふとてきりけうのれ福のえああ
十八番

左 師子舞

わねあつてねねとてゆわくやたのねねとてゆわく
右 勝 稿

ちくはもはつひつねとてゆわくやたのちくはもはつひつね
左 師子舞の自願は師子とてゆわくやたのちくはもはつひつね

骨なり一能をたつてぬる傍題とも難く
 へらふ為紫浮水とて類ふて我士と云ふ元
 久の勅撰且つ経めりゆゆと思出たりん
 骨なりと云ふはかゝるを師子孫に常き
 能ふて骨なりと云ふを師子お撲ともや
 ちと云ふは骨なりと云ふや何と云ふに世に
 りと云ふは骨なりと云ふは利と云ふは
 骨なりと云ふは骨なりと云ふは骨なり
 と云ふは骨なりと云ふは骨なりと云ふ
 骨なりと云ふは骨なりと云ふは骨なり

十九番

十九番

十九番

是をあげてと云ふは骨なりと云ふは
 骨なりと云ふは骨なりと云ふは骨なり
 骨なりと云ふは骨なりと云ふは骨なり

何と云ふは骨なりと云ふは骨なりと云ふは
 骨なりと云ふは骨なりと云ふは骨なり
 骨なりと云ふは骨なりと云ふは骨なり
 骨なりと云ふは骨なりと云ふは骨なり
 骨なりと云ふは骨なりと云ふは骨なり
 骨なりと云ふは骨なりと云ふは骨なり

五
七
二

豐和齋

五

卷五十二

新五十二
四十一

二十二番

左持

算をさ

中程はあつたうけよとけるえんおのまのうけの
者 虚妄僧

う入るをやうおのま法師をてえてもあつたう
算をさる述懐懐程のあつたをけうらうと
やうとて建物をめうおの貝うこはうとわ
こをわめつたあをせしは是あはれやあはれ
才三尺けうあつて日経をもとふ人をけう
一生涯乃果報をも自身ふんうめをさる

うおとひえんおのまのまをめうとて
いかくさうあつてやあをけうらうと
二日乞食の私吟をけうとてわうとて作あつて
世越うとてあつたうとてうとてうとて
方便とてあつたうとてあつたうとてあつた
初めては糟法師のあつたうとてあつたう
あつたうとてあつたう

二十三番

右持

高野をさる

おれおれうけうけうけうけうけうけうけう

巡禮

二十四番

九

右
接

49

あまのうみへていづれもたふさぐをたふさぐ
稱名念佛の一門ハ自力聖道の諸宗よりまさる
あまのうみへていづれもたふさぐをたふさぐ
事ありしはたふさぐをたふさぐ一門ハ自力聖道
うみへていづれもたふさぐをたふさぐ
身は皮と云ふものなりけりしはたふさぐをたふさぐ
夷逸の神といふことありしはたふさぐをたふさぐ
いとよくていづれもたふさぐをたふさぐ
あまのうみへていづれもたふさぐをたふさぐ

の息は諸右の身は皮もきけはあ

二十五番

左持

へうちう侍師

つふえ馬あゝぬ給の倉うやうきまきとあゝうらうの

右

うらうの

あれ日とくひはけさほさあひは月とくひるき殿はうら

素法後師はあゝたはあうらあゝ馬あゝぬ給

の倉うやうきとけうとくあて思ふうぬるは

わけあゝうらうけうふとくはあゝぬ給

海さうとくはあゝぬ給とくはあゝぬ給

馬は屋敷もさうはあゝぬ給とくはあゝぬ給

うらうとくはあゝぬ給とくはあゝぬ給

将來にうらうとくはあゝぬ給とくはあゝぬ給

城さうとくはあゝぬ給とくはあゝぬ給

さうとくはあゝぬ給とくはあゝぬ給

さうとくはあゝぬ給

二十六番

左

うらうの

長河やうとくはあゝぬ給とくはあゝぬ給

右持

奥昇

鑒百姓困乎

二十八番

たお

材木うり

あゝ神の我をたふしむるの門のさきと人々

若

竹賣

うのあゝさゝりて竹のすまは家々の志はけさ

材木賣れ奇紺うこの白袴かといぬをらひあ

へー竹賣又自然期に病介とらうのうのあゝさ

へもねさう一段のふにけりた右を接方可為持

二十九番

た

結む

竹のあゝさゝりて竹のすまは家々の志はけさ

右

あゝさゝり

風呂火灯めり桶のうりてあゝさゝりてあゝさ

左歌結桶師の三昧正妻といふも家業れ念ある

竹のあゝぬんハ海きといふはうう人々制戒城

そとて家胸襟神あはけり右とけ句の三句は

五種の家々をいふて南都一境をさし切城は

のまゝ海をさしハ万物城のせき。徳ありとさわ

ははらうりて一庭さき家良れ土たうりて

桑へも伊くくうのかりの侍むた、聲、韻、
福、侍、まゝに、は、さ、あ、ひ、可、能、也、

三十番

左持

さ、月、也、海、の、ま、も、あ、る、あ、め、と、ま、の、い、い、と、糖、は、

右

う、あ、ひ、子、ま、ま、あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、地、黄、黄、

あ、方、け、う、と、物、た、あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、地、黄、黄、

あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、地、黄、黄、

四、時、あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、地、黄、黄、

あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、地、黄、黄、

あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、地、黄、黄、

あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、地、黄、黄、

あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、地、黄、黄、

あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、地、黄、黄、

あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、地、黄、黄、

あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、地、黄、黄、

三十一番

左持

其はく

あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、ま、の、い、い、と、あ、め、と、地、黄、黄、

古

うや身佛くさうとさうさうさう世の神も志あめ
 うさ世の神も志あめ花ううといふるううとも
 いたはるもある身ううの君味あをなけさ
 他人乃身方なる哉ううあう自己乃高貴ふ
 懐をれゆさう思ひてんあふさ海よこさう
 ゆうさうあめたうう花のちふふ臥れさう
 述て感懐さうさうさうは集ううさう馬祖
 母もあううさうさう

三十二番

左勝

ふう

右

ふう

ふあひさあひこの竹葉はさうのうううう
 左勝さうさうさう宿もあううのあううう
 あううさうさうさう内野の道れさうさう
 さううううさうおちさうさうさうさう
 さううさうさう道秋ハ家ゆさうさうさう
 母乃ううさう神さうさう雪れ中さうさう
 さううううう太掌富さうさうさうさう

